

第1章 調査の経過

今年度の発掘調査は、史跡整備計画に基き昨年度同様に三堂推定地内に調査区を設定した。事前のボーリング調査などから、何らかの建築遺構に当たることが予想された。調査区は、二階堂の南側に位置していたと伝えられる阿弥陀堂の確認と、二階堂と阿弥陀堂との関係（距離、廊の有無など）、三堂側の池汀線の確認に主眼を置いて設定した。さらに調査中に整備委員会の指導、助言により、堂跡の規模確認と池汀線確認のために拡張区を設定した。この他に、調査区東側を東西に流れる旧水田排水路を浚渫した時に池底確認調査を行い、さらに最終日に調査区の南側で遺構面までの埋没深度確認調査を行った。調査区は、G・H-3・4・5区に跨がり、昨年度の調査で確認された二階堂跡の南隣りに当る。現地調査は昭和59年8月27日に開始し、約530㎡を発掘して同年11月26日までに埋め戻しを完了した。その間の経過については以下に日誌の抜粋を記す。

8月27日 重機が入り掘削を開始する。

9月4日 建築跡の礎石と思われる大きな河原石を2ヶ所で3つ検出する。

9月8日 調査区南壁4軸付近より炭化物層の落ち込みが見られ、この落ち込み確認のために南壁にそって1m幅でトレンチを設定する。

9月10日 調査区中央付近で井戸を検出する。又南壁にそって設定したトレンチから円形の掘り方を持つ、角柱根を残す柱穴を検出する。

9月13日 南北3間以上、東西9間以上になるとと思われる角柱列を検出する。

9月27日 池汀線確認のために拡張区を2ヶ所設定。

9月30日 廊跡の西側に拡張区を設定する。

10月9日 両拡張区において多量の砂礫の推積を持つ池汀線を検出する。

10月20日 東西2間、南北6間の廊跡と角柱列から東西4間、南北2間以上の堂跡を確認。

10月22日 堂跡下の土層観察のために、井戸より南壁の間に深掘りを入れる。

11月5日 全景写真の撮影を開始する。

11月7日 全景写真の撮影を終了する。

11月20日 排水路浚渫を行い合わせて池底と東岸池汀線の確認調査を実施する。

11月22日 平面図、土層図などの作成を終了。

11月26日 山砂及び排土による埋め戻し完了。

器材を撤収して現地調査を終了。

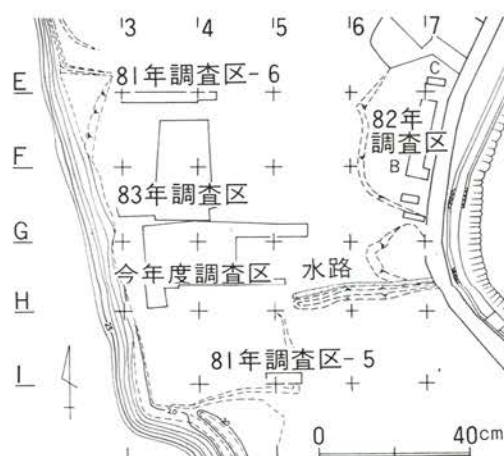


図1 調査区位置図

第2章 検出遺構

1. 層序および概要

後世の水田耕作土である灰色砂質土はかなりの深部にまで及んでおり、これを重機で排除すると土丹（泥岩）小塊や瓦礫を多量に含む暗褐色粘質土に達する。この層は山際（西側）で5cm前後、苑池近く（東側）で10cm前後の厚味があって、南域を除いた調査区全域を覆っており、その下に遺構検出面がある。地表下40～50cm、標高19.2～19.4m前後で、昨年度調査の堂跡検出面と変らない。

この面で検出した遺構には、堂跡と覚しい基壇状の高まりと柱穴列、この堂跡と昨年度検出の堂跡との間に位置する廊跡、池汀線、廊前面の性格不明の土壌や溝、井戸等がある。

遺構検出面は調査区の西側約3分の1程が地山黒褐色粘質土、東側は概ね暗褐色の地業層上面であり、西南域には一部岩盤および岩盤崩土が面を成している。池側には暗褐色土上面に堅牢な土丹版築が構築されている。以上のことから、前年度調査区と同様ここでも、背面（西側）は山裾の岩盤削平によって、前面はその際に出た土砂を低地部分に盛土することによって平坦な面を造成したことが推定できるが、前面の地業深度については、深掘りしてみたものの、遺構保護の観点から範囲の制約があって、今ひとつ明らかにできなかった。ただ、深掘り2の最深部（平坦面からの深さ約1m前後）に、岩盤の切り崩されたものと思われる拳大～人頭大土丹の散乱した緩傾斜の層があり、この層から古代遺物も出土している点からみて、少なくともこの辺の深さまでは地業層であると言うことはできるであろう。

池寄りの面上には、薄い砂礫がところどころに認められ、池中の厚い砂礫層につながるが、この面上砂礫層が意図的に撒かれたものか、人の往来によって池汀から自然にもたらされたものかは不明である。

また、南東拡張区では、遺構検出面を掘り下げてみたが、70cm程で堅い黒色土面に当り、上面から木製品、炭化物層などを検出した。5軸より東は上面の汀線を保護するため深掘りはしていない。

2. 堂跡

調査区南西部において、周囲に角柱列を配した堂跡とみられる基壇状の高まりを検出した。また原位置を失っていると思われるが、堂そのものを支えた大型の礎石を3個基壇上面に確認した。

基壇

調査区南西部では、水田床土の下で暗褐色粘質土の包含層がきわめて薄く、すぐに土丹塊混りの黒褐色粘質土になり、精査の結果、基壇状の盛り上りであることを確認した。周辺平坦面より、20

～30cm程の高さであるが、後世の水田耕作によって上部は削平されていると考えられる。上面の標高は現況で19.4m前後であり、これは昨年度調査で検出した堂跡確認面より20～30cm程高い。

土層断面の観察から、構築方法を次のように推測することが可能である。

山裾の削平と低地の地業とによって平らにならした面上に、新たな盛土によって壇状部を築いて基壇としてのおおまかな区画を設け、次に前庭部に地業を施し再びほぼ平坦な面を造り出す。これに続いて基壇周囲に角柱柱穴を掘り込み角柱を据えつけたとみられ、角柱列内側に基壇版築が再度なされたと想像できるが、それ以上の部分は削り取られて不明である。

最初の壇状部裾とそれに続く黒褐色粘質土上面（前庭部地業層下）に、炭化物の推積がところどころに認められ、また遺物も数点出土している点は、明らかにここが一定期間地表にあったことを示しており、壇状部と前庭部の地業との間に時間の隔たりがあったことは確実であるが、壇状部裾とそれに続く面上に創建の頃のものに比定しうる瓦が全く含まれていないところからみて、少なくともこの面と前庭部地業層との間に限って言うなら時間の隔たりが改修であるとはいささか考えにくく一連の工程の中の空白期間であると解釈することもできよう。

礎石

堂の本体を支えたと思われる大型の礎石3個を、基壇上面から検出したが、転覆させられたり移動させられたりで、いずれも原位置にとどまっていたとはいなかった。3個とも長径1m前後で昨年検出の堂跡礎石よりもひと回り小さい。基壇の北西で発見された2個は、ノミで加工したと思われる円形の平らな直径30～40cmの柱座を残す。これは昨年度検出の堂跡礎石のそれのおよそ半分程でしかないが、礎石の小型化傾向からみて、柱そのものも細くなっていることは十分考えられよう。しかし火災に遭って表面が剥離している可能性も残っているので、詳細は今後の調査に期待したい。

礎石掘方は削平によるためか、殆んど残っておらず、僅かに北西部の2個の周囲に深さ20cm程の浅い凹みが認められる程度であるが、これとても覆土は水田耕土の灰色砂質土であって、おそらく耕作の際障害になるため、脇に穴を掘って石を転落させようと試みたものであろう。また、根石らしき河原石も全く見られなかった。

角柱列

基壇周囲には、角柱の遺存する柱穴列が直線的に配置されている。基壇裾部と四囲の平坦面とのほぼ境い目にあり、柱穴（ア・シ・タ）の3穴を除いて角柱根が遺存している。柱間は東西10間、南北5間以上であり、軸方位はN-12°-Wで昨年度検出堂跡のそれに等しい。角柱はすべて立ち腐れの状態にあるため、いずれも原位置を概ね保っていると思われる。柱間距離は角柱芯心で、東西、南北とも角の1間が126cm（4.2尺）後述する廊の取りつく、堂北西面より2～5の間の4間が165cm（5.5尺）づつで、その他は150cm（5尺）を測る。梁行で165cm×4間の部分には後述する廊跡が取りつく。

角柱は長辺20～22cm、短辺は16～18cmで概ね7×6寸であるが、北西隅の柱穴（カ）のみ7×7寸の、規格の異なるものが使用されている。柱穴（カ）が7×7寸の方形であるのは西・北方向か

表1 堂跡角柱列観察表

番号	柱穴の規模			柱痕	角柱の規模			礎石	木皮
	東西	南北	深さ		東西	南北	残高		
ア	64	60	48	—	—	—	—	○	—
イ	68	56	52	○	19	16	18	—	○
ウ	60	52	60	○	18	16	11	—	○
エ	60	44	60	○	20	16	15	○	○
オ	68	56	60	○	20	16	20	○	○
カ	76	68	56	○	22	22	16	—	○
キ	72	64	64	○	16	19	16	○	○
ク	72	72	64	○	17	22	20	○	○
ケ	88	88	66	○	18	20	20	○	○
コ	64	72	46	○	17	22	14	—	○
サ	68	72	48	○	20	20	16	—	○
シ	64	64	48	—	—	—	—	○	—
ス	68	60	40	○	20	22	8	○	○
セ	76	76	44	○	19	20	12	○	○
ソ	64	64	48	○	18	21	16	○	○
タ	64	72	18	—	—	—	—	○	—
チ	76	60	36	○	23	20	16	○	○
ツ	60	76	40	○	20	22	15	○	○
テ	68	—	48	○	—	18	14	○	○

○印は現存を示す。数字の単位はcm。

表2 廊跡掘り方観察表

番号	掘り方の規模			礎石	根石	備考
	東西	南北	深さ			
a	90	136	21	○	—	
b	104	140	16	—	○	
c	120	106	15	—	—	
d	90	116	24	—	○	
e	170	120	16	○	—	
f	106	116	18	—	○	
g	124	100	20	—	○	創建期の瓦を含む。
h	146	150	14	—	—	深さ50cmの柱穴有
i	146	108	10	—	—	深さ50cmの柱穴有
j	98	112	22	—	○	創建期の瓦を含む。
k	106	108	16	—	—	深さ57cmの柱穴有
l	120	120	21	—	—	
m	116	86	14	—	○	創建期の瓦を含む。
n	95	92	8	—	○	
o	110	108	18	—	○	深さ36cmの柱穴有
p	100	82	11	—	○	
q	84	112	9	—	—	
r	84	88	7	—	—	

○印は現存を示す。数字は単位はcm。

らの柱見付を統一したものであろう。これらは昨年度検出の堂跡角柱が7×9寸であるのに比べるとひと回り小さい。またすべて長軸方向は建物に平行して据えられている。これら、角柱のうちには、短冊状に剥いた木皮が縦位に貼り付けられているものがあり（セ・チ）、また柱根を残す柱穴覆土にはすべて木皮片が含まれているが、おそらく防腐措置であると思われる。

掘方は径60～80cm程で概ね円形の平面形を呈し、深さは確認面から40～65cmであるが、北西隅の柱穴（タ）のみ20cm弱と浅い。過半数の掘方に径20～30cmの偏平な河原石の礎石が残っている。ただ、礎石を用いないこともあったのか、柱穴（イ・ウ・カ・コ・サ）には、柱根が原位置に留っているにもかかわらず下には礎石がみられなかった。また柱穴（シ）には2個の礎石が入っていた。

堂跡背面の河原石

堂跡背面の南西拡張区西壁際で、河原石を4個検出した。規則的に並んでいる訳ではなく、またさらに西側を調査して溝などを検出した訳でもないが、堂跡背面に石列をもつ前年度の例からみても位置的に無視できないため、雨落ち溝の名残りである可能性あり、としておく。結論は次年度以降の調査に委ねたい。

堂の規模

先述のとおり、基壇上には原位置を失った3個の礎石があるのみで、掘方もすべて削り取られているが、角柱列から梁行の堂の柱間寸法を復元することは可能であると思われる。桁行に関しては、南側が未調査であるため、現段階で判明した数字のみ挙げておく。

昨年度検出の堂跡の例からみて、本年の堂跡においても同様に、四囲の角柱列の柱間2間をもって堂本体の1間を成しているのは間違いなからう。とすると、梁行は4間ということになる。角柱芯心距離から柱間を割り出すと、廊の取りつく西寄り2間が各11尺(330cm)、正面寄りの2間が各10尺(300cm)、梁行は42尺(1260cm)であったことが推測される。桁行の柱間は、ここまでのところ各10尺である。

3. 廊跡

調査区西壁寄りで検出した南北に細長い建物跡で、北・南面はそれぞれ、昨年度と今年度検出の各堂跡に取り付く形になっている。また、付属的な施設として、前面に雨落ち溝側壁石列の抜き取り痕らしき溝を確認している。

廊跡検出面は地山層である黒褐色粘質土で、雨落ち石列抜き取り痕らしき溝は、谷間を埋めたと推測される地業層上面にあり、いずれも瓦礫混りの暗褐色粘質土下に覆われるが、基壇などの高まりは認められなかった。掘方は計18口を数えるものの、その多くが底面を僅かに残しているに過ぎない。こういった点は、瓦礫を包含する暗褐色粘質土が形成される以前に、この付近が既に削平を受けていることを示している。

また、以上のような事情で、柱芯心の位置は知り得なかったため、以下に述べる柱間などの数値は、昨年度および今年度に検出した、堂跡周縁の角柱芯心から割り出したものであることをことわっておく。

規模

東西(梁行)2間、南北(桁行)5間の規模の複廊形式を持っている。柱間は梁行330cm(11尺)桁行255cm(8.5尺)であり、全体では22尺(660cm)×42.5尺(1275cm)を測ることになる。

柱通りは昨年度および今年度検出堂跡の、後ろ側一・二の間の3列の柱通りに載っており、廊の北・南面からこれら堂跡の周縁角柱までの距離はそれぞれ255cm(8.5尺)と224cm(約7.5尺)である。

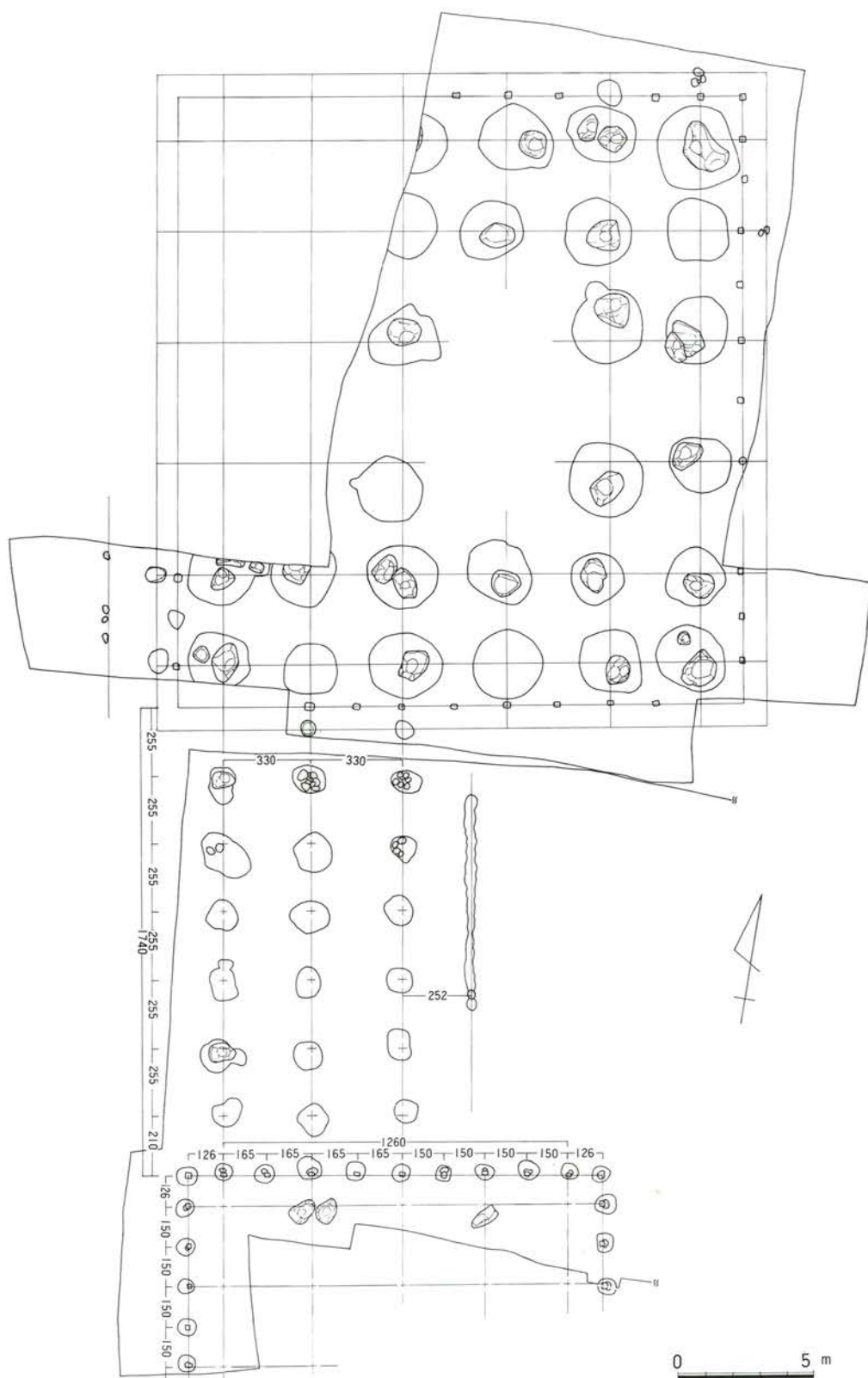


图2 建物跡配置模式図

礎石と根石

礎石は掘方（a・e）に残っている。また礎石の下に敷かれた根石の遺存した掘方が幾つかあり、また石のない掘方にも、多く抜取痕らしい凹みが認められる。

掘方（a・e）の礎石はいずれも長径1m近くあり、上面にノミで平たく削り出した径30～40cmの円形の柱座がみられる。この二点の礎石は、ほぼ原位置をとどめており、柱座は堂跡角柱から推定した柱通りに正確に載っている。

掘方（g・m・n）などの観察から、根石に使用された河原石は径20～30cmの円形で、石と石との間に黒褐色の粘土を詰めて固定されていることが判った。また（m）では根石が二段に積まれており、当初は何段か重ねて礎石を受けていたことも考えられる。

掘方（g・j・m）の底面からは、ほぼ創建期に比定される瓦が貼り付いた状態で出土している。

雨落ち

廊跡前面（東側）に、桁行に平行した浅いやや不明瞭な溝を検出した。底面は凹凸が激しく、南端で径約30cmの円形河原石が据えられている点からみて、おそらく列石の抜かれた痕跡であると思われる。位置と方位からみて雨落ち溝の縁石列である可能性があるのも、ここに挙げておく。

幅30～40cm、長さは現況8m弱を測る。廊東側桁行列芯心から溝中心軸までの距離は252cmで、廊桁柱間に近い。

雨落溝縁石の内・外いずれであるかは不明である。

4. 池汀線

池汀線を確認するために拡張区を2ヶ所設定した。調査区北東辺に長さ18m、幅4mで東へ延ばした北東拡張区、南東辺に長さ13m、幅1mで東へ延ばした南東拡張区がそれである。

北東拡張区では、5軸の東約1mを過ぎた辺りから土丹版築面が東に向かって緩やかに落ち始め上面に砂礫の厚い堆積が見られるようになるため、この付近が池汀線であると判断した。砂礫層は大きく上、下2層に分けることができ、下層は創建期に属すると思われる多くの瓦が出土したが、上層の砂礫層からは瓦の出土はほとんどなかった。この拡張区東南角で大きな鎌倉石の一部を検出した。これは地中探査によると直径2mほどもあり脇を50cm大の土丹で固めて据えられており、土丹版築面の高さとはほぼ等しく水面上に顔を出していたことがわかる。

南東拡張区では、5軸の西3m付近から土丹版築面が認められ、5軸に到って傾斜し始める。ここでも池中には砂礫が厚く堆積している。また拡張区東端に、原位置を留めるかどうかは不明であるが、長径1m弱の苑池の立石と思われる河原石が認められた。この砂礫層の中からは少量の瓦が出土した。

池汀線と建物の関係からみると、北東拡張区では、昨年度調査で検出した堂跡の前面角柱列より池汀線まで東に約16.5m、南東拡張区では、堂跡前面角柱列より池汀線まで約16mを測り、伽藍配

置に概ね応じていることがわかる。

検出した池汀線は陸部と池部との境がやや不明瞭で傾斜は緩やか

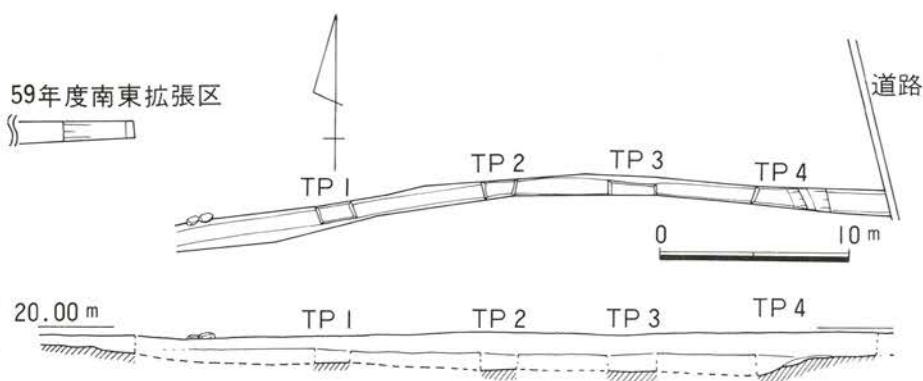


図3 水路浚渫時の池底確認調査地点及び池底復元図

である。池中に多量の細かい砂礫が敷かれていることから、水位の上下により池汀線も変化する洲浜状のものを想定することもできる。

排水路浚渫時に池底と東岸の池汀線を確認した。3ヶ所で検出した池底はほぼ平坦で、土丹で築き固められていた。この付近では、南東拡張区の池汀線と、水路浚渫時に確認した東岸池汀線より池の幅は約40cmで、深さは池汀線肩から約1mである。

5. その他

井戸

調査区のほぼ中央付近で検出された。1辺約3m、深さ約2.30mの掘方に1辺約1.30mの鎌倉石(凝灰岩)の切石を方形に組み合わせた石組枠を持つ。井戸が廃棄される時に崩されたらしく、底より4段だけを残している。出土の瓦に新旧の混在が見られるため、築造の年代は不明である。しかし石組枠に使用されている石材に、おそらく永福寺に関する建物の基壇外装用と思われる加工石材や、火災の痕跡を留める加工石材が含まれているところから、永福寺廃絶以後のものと想定できる。

溝・土壌

調査区東寄りの遺構検出面上に深さ約10cm・幅30cm程の浅い溝が数条検出されたが、出土遺物はなく覆土に細かい砂利や上層の土が含まれることから、この溝は後世の耕作による攪乱と思われる。又廊跡の東側で径60~100cm程の円形ないし楕円形の土壌が検出された。溝同様の覆土で遺物は出土しなかった。詳細は不明である。

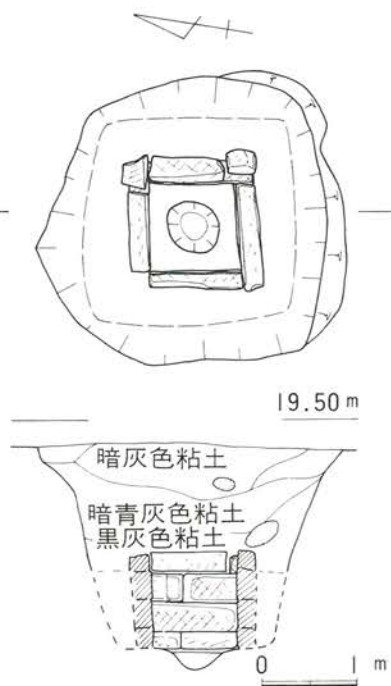


図4 井戸

第3章 出土遺物

今年度の発掘調査で出土した遺物の大部分は瓦類であるが、その他に舶載磁器、国産陶器、土器、石製品、木製品、先史・古代遺物が少量ある。廊跡掘方内及びかわらけ溜り1・2、深掘り1積増面下遺物包含層からまとまった資料が出土したが、遺構に伴って検出された遺物は少数で、大半は遺構検出面上及び包含層に散乱または池中や井戸跡などに、廃棄されたような状態で新旧のものが混在して出土した。

1. 瓦類

瓦類は調査区全体から破片数にして約3000点出土したが、特に池中と井戸跡からまとまった資料が得られた。その種類は鎧瓦・字瓦・男瓦・女瓦・鬼瓦等である。女瓦には人名・寺銘を押印するものや、叩き目に寺銘があるものも含まれている。瓦の種類別の出土量と出土地点は表3に示したとおりである。

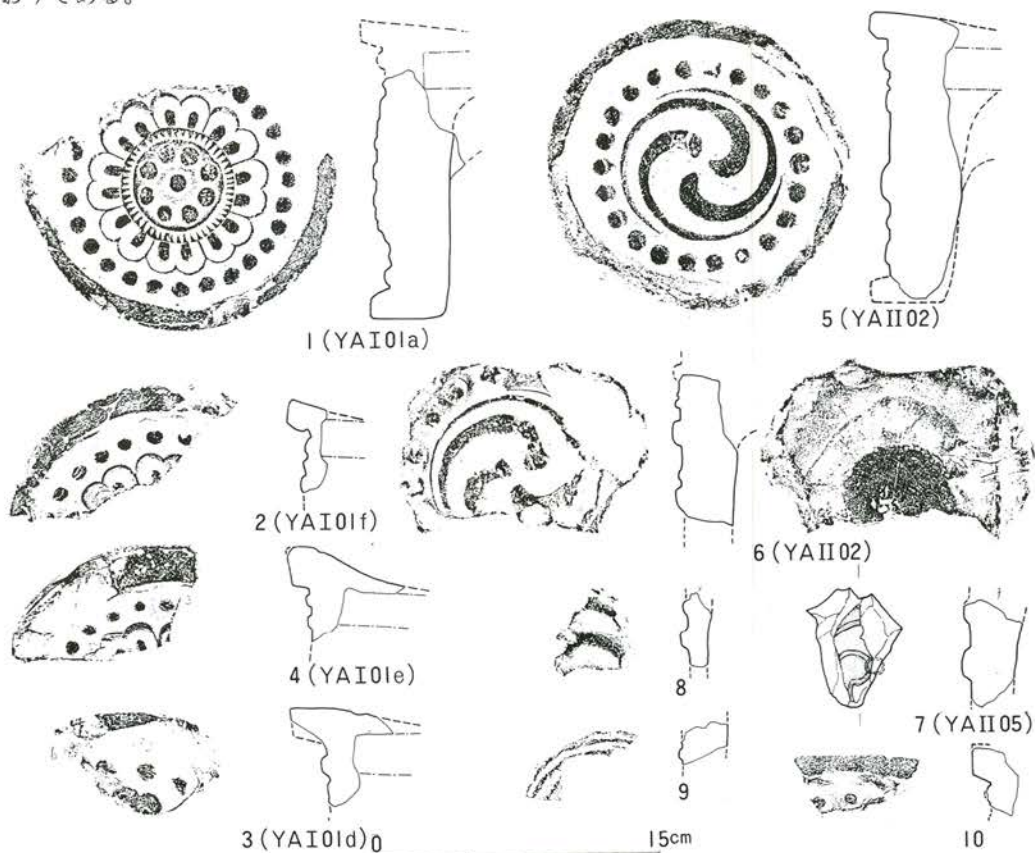


図5 鎧瓦

鏡(軒丸)瓦(図5)

合計23点出土したが、文様の不明瞭な資料を除くと18点3型式が認められた。

Y A I 01 (図5-1~4)；本型式は八葉複弁蓮花文鏡瓦で、中房には1+8の蓮子をおき、その外周に短い雄シベを配する。外区内縁には珠文を巡らせ、周縁は直立し幅が広い。合計13点出土。

1 (01a) は范の彫りが深く、中房の蓮子と内縁の珠文が大粒である。3 (01d) は蓮弁の全体を浮き出して平面をなし、その上に子葉を置く。4 (01e) は范の彫りが浅く、文様が平面的である。2 (01f) の花卉の形や大きさは01aに近いが、珠文の間隔が異なる。以上、4 范種が確認できた。

Y A II 02 (図5-5・6)；合計4点出土した。内区に左廻りの三巴文を配し、その外側に大粒の珠文が均等な間隔で巡っている。周縁は高く直立し幅が広い。6 は裏面中央に「守」の文字が刻ま
註1 註2

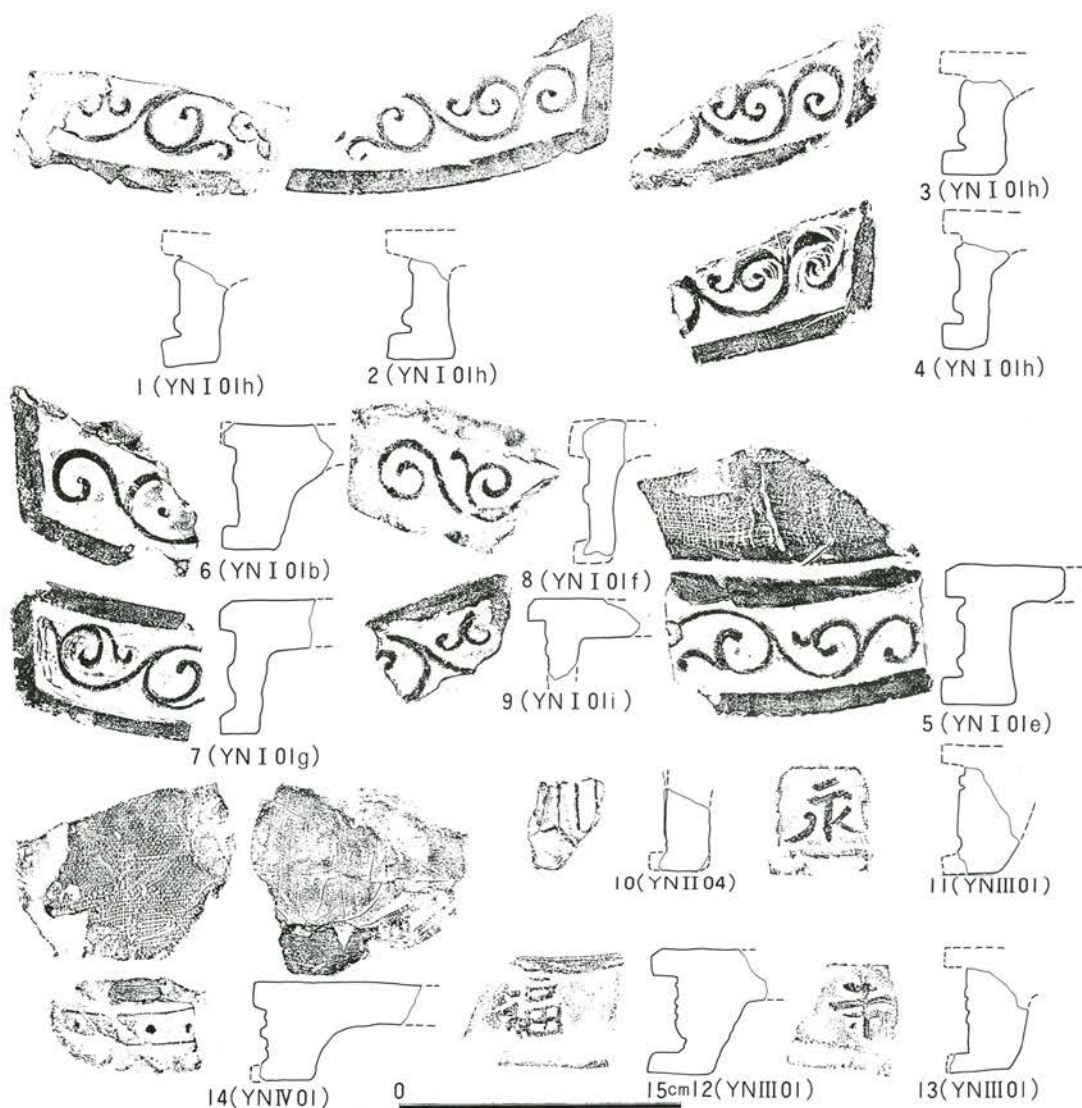


図6 宇瓦

れている。昨年度の調査では「□元」銘の押印が同型式で認められた。

図5-7～9の巴文鑑瓦片はいずれも胎土に砂と石粒を多く含み焼成は良好である。7は左廻り巴文の中央に竹管文が捺されており、Y A II 05と考えられる。

宇（軒平）瓦（図6）

合計53点出土し、瓦当文様によって5型式が確認された。

Y N 01（図6-1～9）；4花卉の花文を中心飾とし、左右に唐草を二反転もしくは三反転させた均正唐草文である。合計42点出土したが、小破片が殆んどで、わずかに6範種を確認したに過ぎない。

Y N II 04（図6-10）；太い凸線で下向き剣頭文を連続して配す。

Y N III 01（図6-11～13）；内区に左から「永福寺」の文字を配した寺銘字瓦である。瓦当面は離れ砂の痕跡が顕著である。

Y N IV 01（図6-14）；今回初めて検出された連珠文字瓦である。内区に珠文を横位に連ね、内外区を界線によって分ける。凹面には細かな布目痕を残す。瓦当部は女瓦凸面広端に粘土を貼った接合式で、頸部から女瓦部にかけて縦位のヘラ調整を施す。胎土は精良であり、焼成は軟質である。灰白色を呈す。

今年度出土した軒先瓦は、総計76点を数える。鑑瓦は23点で、そのうちY A 01が13点あり、数量的に少ないが鑑瓦の約60%を占める。次にY A II 02が4点あり、17%で主たる型式であることが知られる。昨年度の出土瓦においてもY A I 01・II 02とY N I 01とが大部分を占めており、永福寺の建築当初の軒はこれらによって飾られていたと推測させるがこうした傾向は後述するとおり、女瓦・男瓦においても認められた。

以上、鑑・宇瓦について簡単に述べてきたが、各型式の提示については次年度の報告に委ねることとしたい。

男（丸）瓦（図7）

破片数にして670点余り出土した。ほぼ女瓦出土量の3分の1に近い。男瓦は凸面を縄目で叩き締めたのちに、ナデや削りで叩き目を消去することが多く、叩き目は残っていても痕跡的なもののが大半である。胎土、焼成の点で2種類に大別出来るが女瓦は4種類以上に分類されており、対応関係から考えてさらに細分が可能である。

A種（図7-1～4）破片数にして555点出土した。胎土は砂を含むが精良である。軟質と硬質の製品があり、灰～灰褐色を呈する。

1は鑑瓦用男瓦で全長39.8cm、男瓦部長34.2cm、男瓦部径16.0cm、玉縁部長4.8cmを測る大形の例である。4は男瓦部径13.7cmを測る小形の例である。しかし男瓦部径14～15.5cm程度で、厚さが2cm前後のものが大部分である。

凸面は丁寧に調整を施して叩き目を消去した例が多いが、男瓦部凸面の段部寄りと広端付近に縦位の縄叩きの痕跡が存る。凹面はいずれも糸切痕と布目痕を残す。糸切痕は広端面に平行した例が多い。男瓦部から玉縁部に至る断面形は比較的なだらかである。玉縁部は側縁を斜めに強く切り落

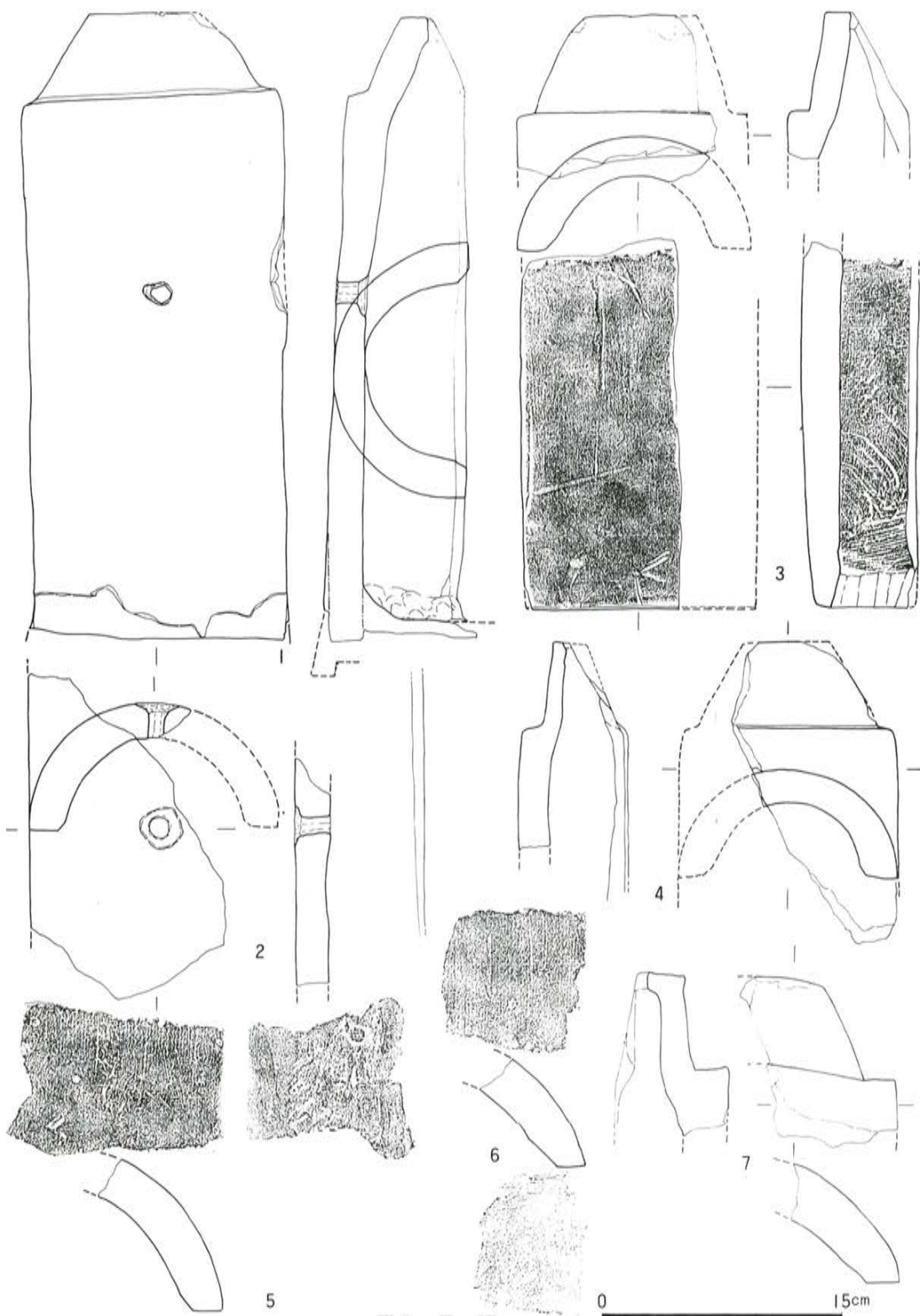


图7 男瓦

している。

B種(図7-5~7);破片数にして115点出土した。胎土は砂・石粒を多量に含み、焼成は良いほうであり、灰白~灰黒色を呈する。A種と区別される男瓦を一括した。火災に遭ったためか赤褐色を呈する例も多い。

凸面のナデ調整は特に丁寧で、叩きの痕跡を残す例は少ない。凹面は細かな布目痕を残すが糸切痕は不明瞭である。

女(平)瓦(図8~11)

女瓦は量的に最も多く、破片数にして2148点を数える。凸面にみられる叩き目の種類は、縄目、斜格子目、特殊文である。

女瓦A類(図8-1~6、図9-1~3);人名押捺の文字瓦を有する一群で、創建期の主要字瓦に比定されるYNI01と同一の縄叩き目を施す。焼成は軟・硬質の二種があり、灰~灰褐色を呈する。厚さ2cm程度の製品が多いが、なかには1.5cmと薄手のものもある。

凸面には側縁に平行して比較的細かな縄目叩きを施す。縄の条間は密であるが、叩き目は概して浅い。叩き目の原体である叩き板は、縄目が広端から狭端まで通る細長いものを使用したと考えられる。また叩き板に巻いた縄の末端処理を示すと思われる資料が1点存在する(図9-1)。また叩き板の短辺の端と思われる圧痕が認められた(図9-2)。

凹面には粗いハナレ砂が付着しており、図8-4のように布目痕を残す例は稀である。

糸切痕は凹凸面共に良く残り、端縁に平行した直線的に走るものが最も多い。また側面に女瓦の両面に直角方向に糸切痕を残す例(図9-3)が見られた。

女瓦B類(図9-4~9);破片数にして15点と出土量は少ない。焼成は比較的硬質で、須恵質の例もある。灰~灰褐色を呈する。厚さ1.5cm前後である。

凸面に小さな斜格子の叩き目が施された一群である。斜格子目の形状により3種類に分けられる。9は片側が太い斜格子文で、4・5は長方形を呈し、6~8は菱形を呈する。女瓦A類と同様の粗いハナレ砂を用いており、砂は叩きによって打ち込まれている。やはり凹面に布目痕を残すものは稀で、凸面と同じ砂が多く付着している。凹凸面ともに糸切痕は認められない。

女瓦C類(図10-1~6);破片数にして122点出土した。斜格子文中に文字・記号を組み込んだ一群である。焼成は比較的良好で、灰~灰褐色を呈し、二次焼成を受けて明るい赤褐色を呈した例も多い。厚さ2.5~3cmを測る厚手の製品である。

凸面は太く大きな斜格子の叩き目が施されているが、ナデ調整されて不明瞭になる例も認められた。叩き目は×状の幅が原体の幅と理解され、側縁に平行して重複させながら叩き締めている。叩きの中には裏字の「大」や「十」、「少」、「上」など文字・記号が見られた。

凹面は不規則なナデがほぼ全面に見られ、ナデの及ばない部分のみ細かな布目痕を残す。このナデは側縁と側面の成す角が縦方向の規則的なナデによって丸く仕上げられている。

女瓦D類(図11-1~8);「永福寺」「文暦二年永福寺」銘の文字押印瓦を含む一群である。胎土

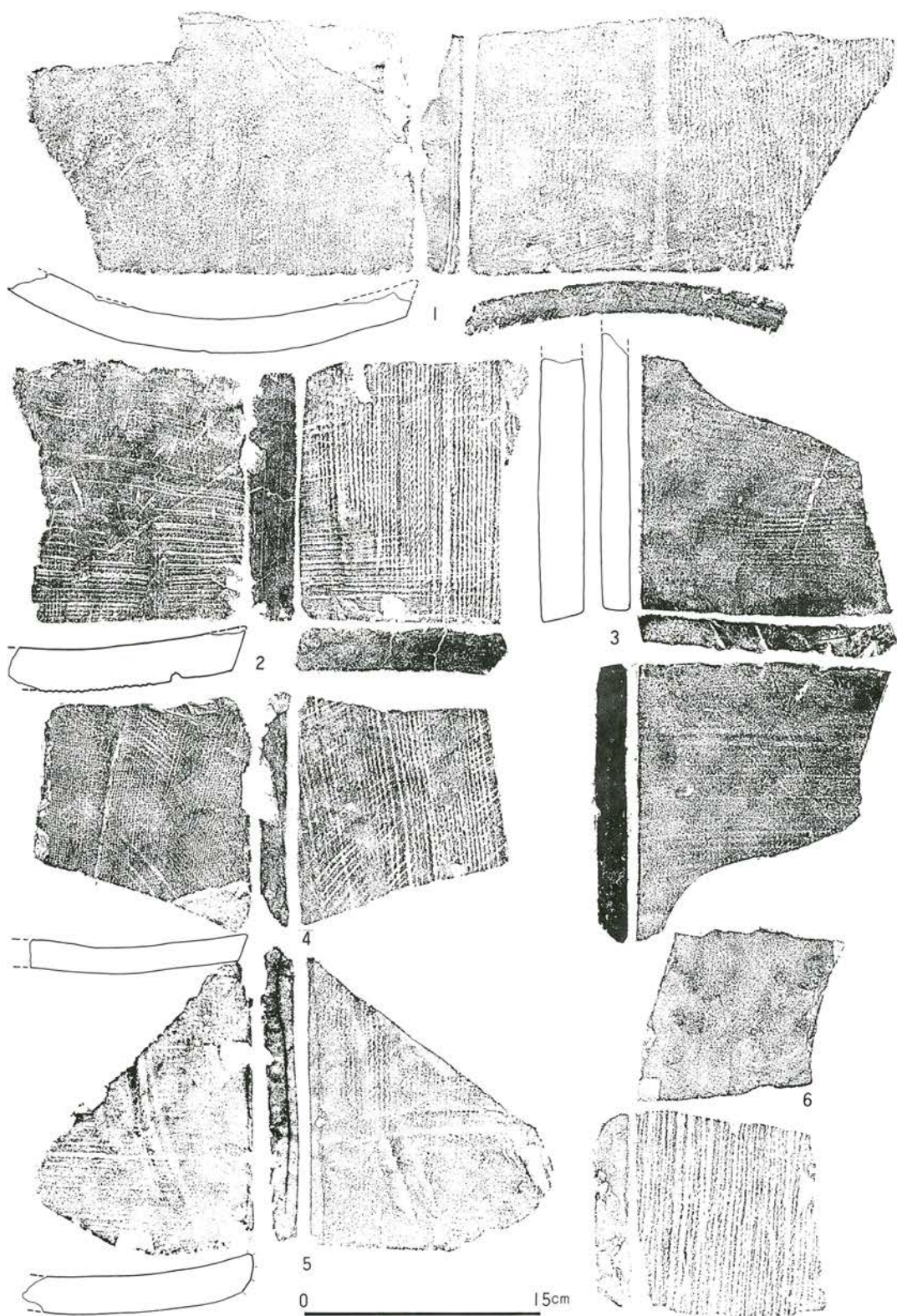


图8 女瓦A類

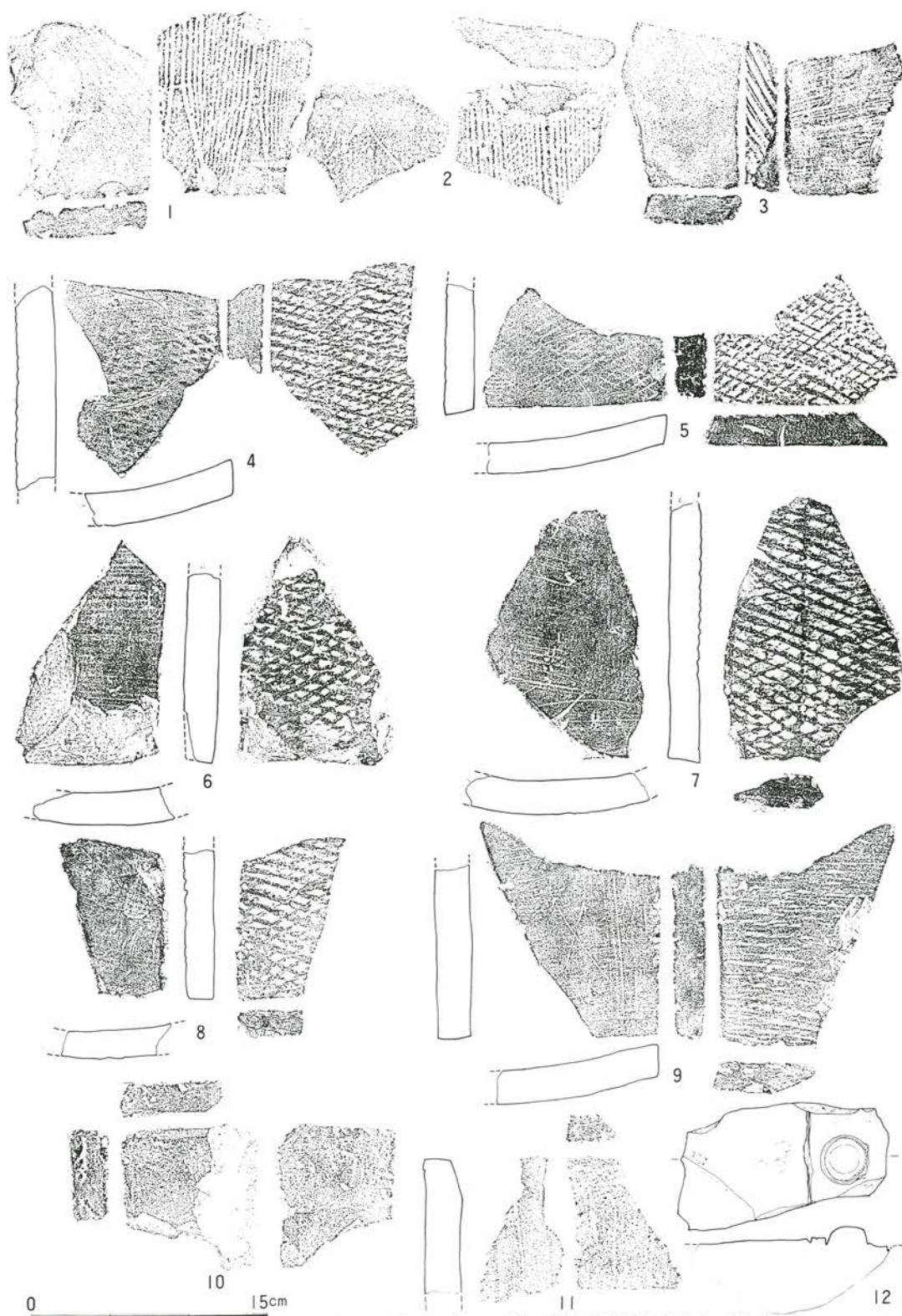
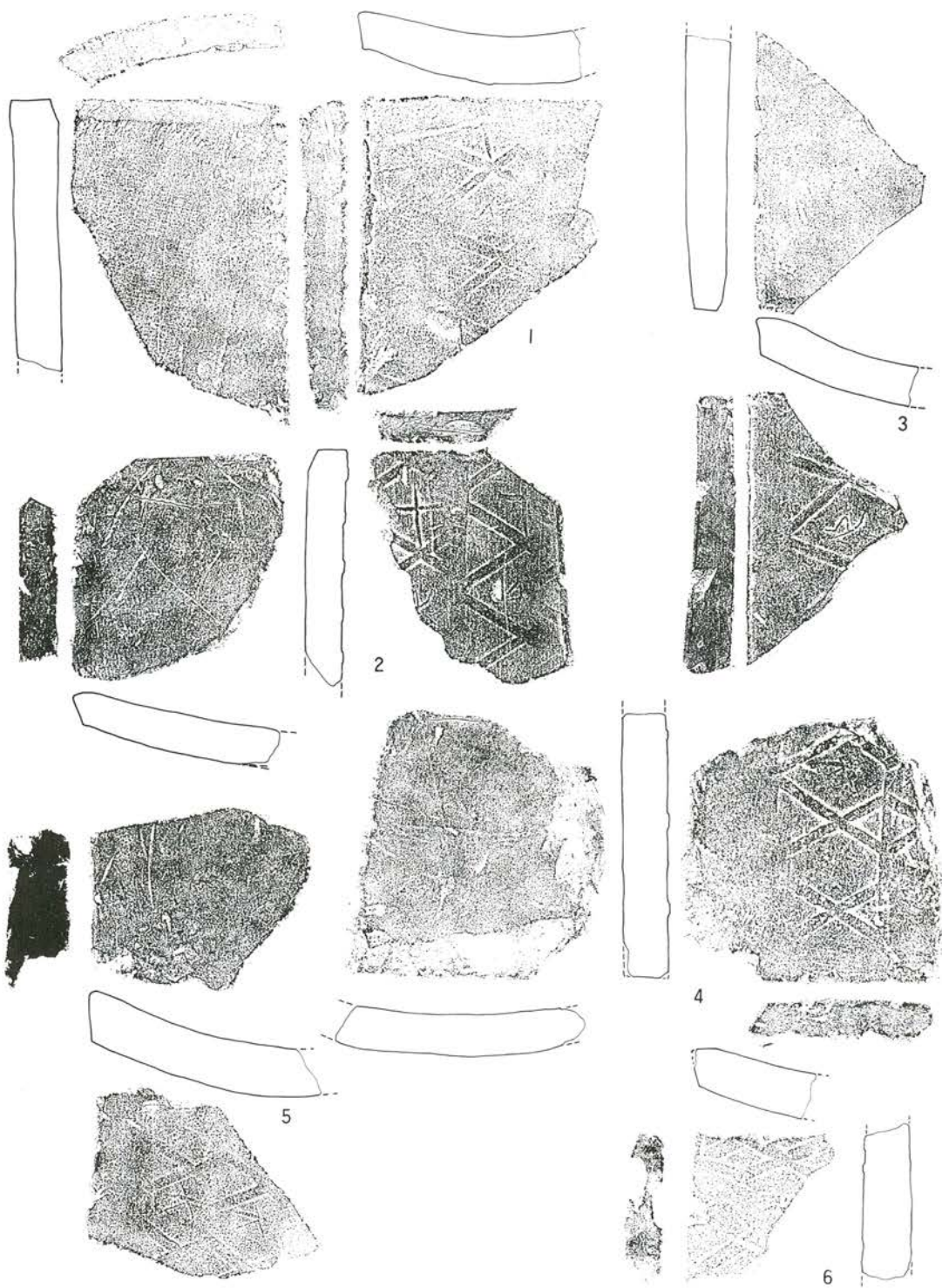


図9 女瓦A類・B類・E類、東海地方産の女瓦、鬼瓦



0 15cm

図10 女瓦C類

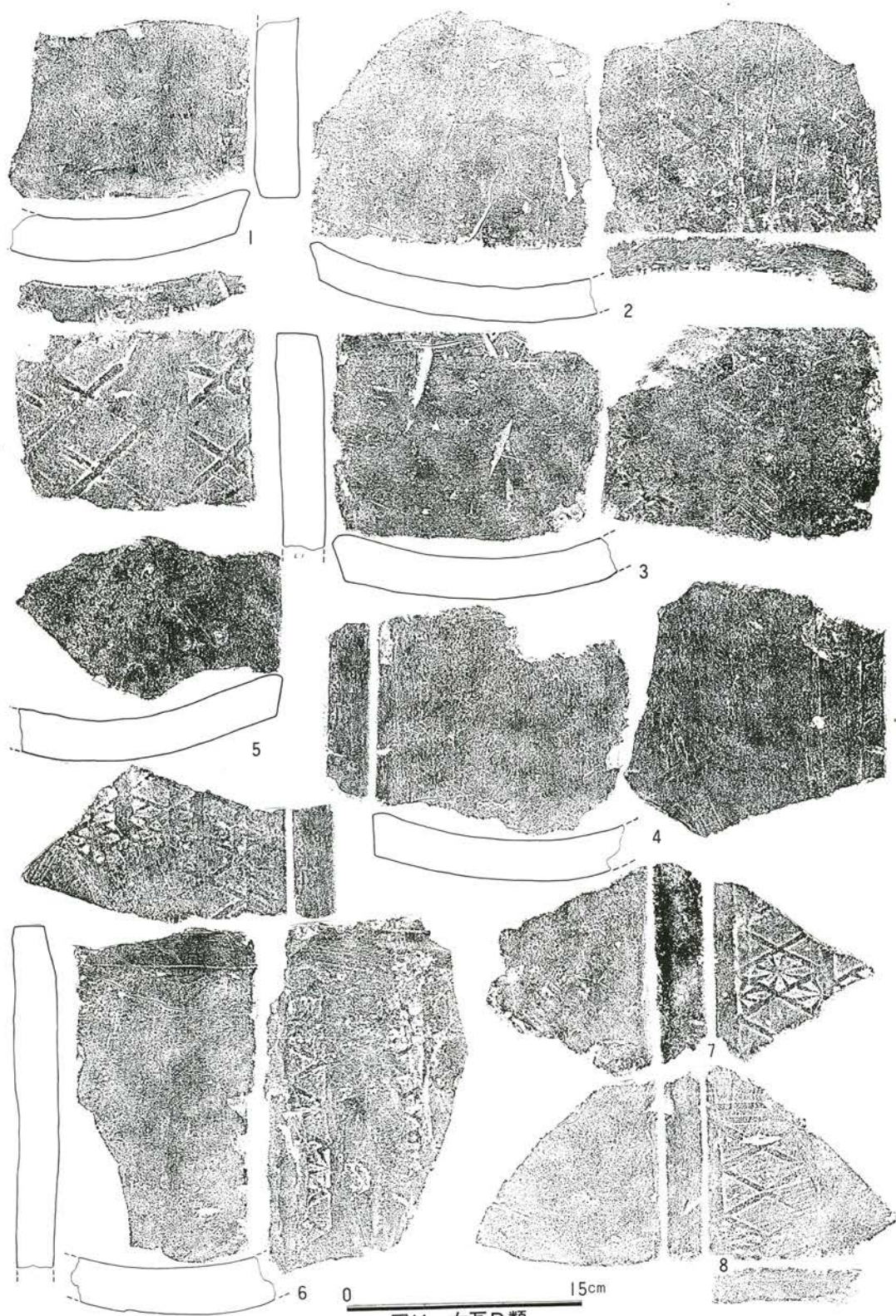


図11 女瓦D類

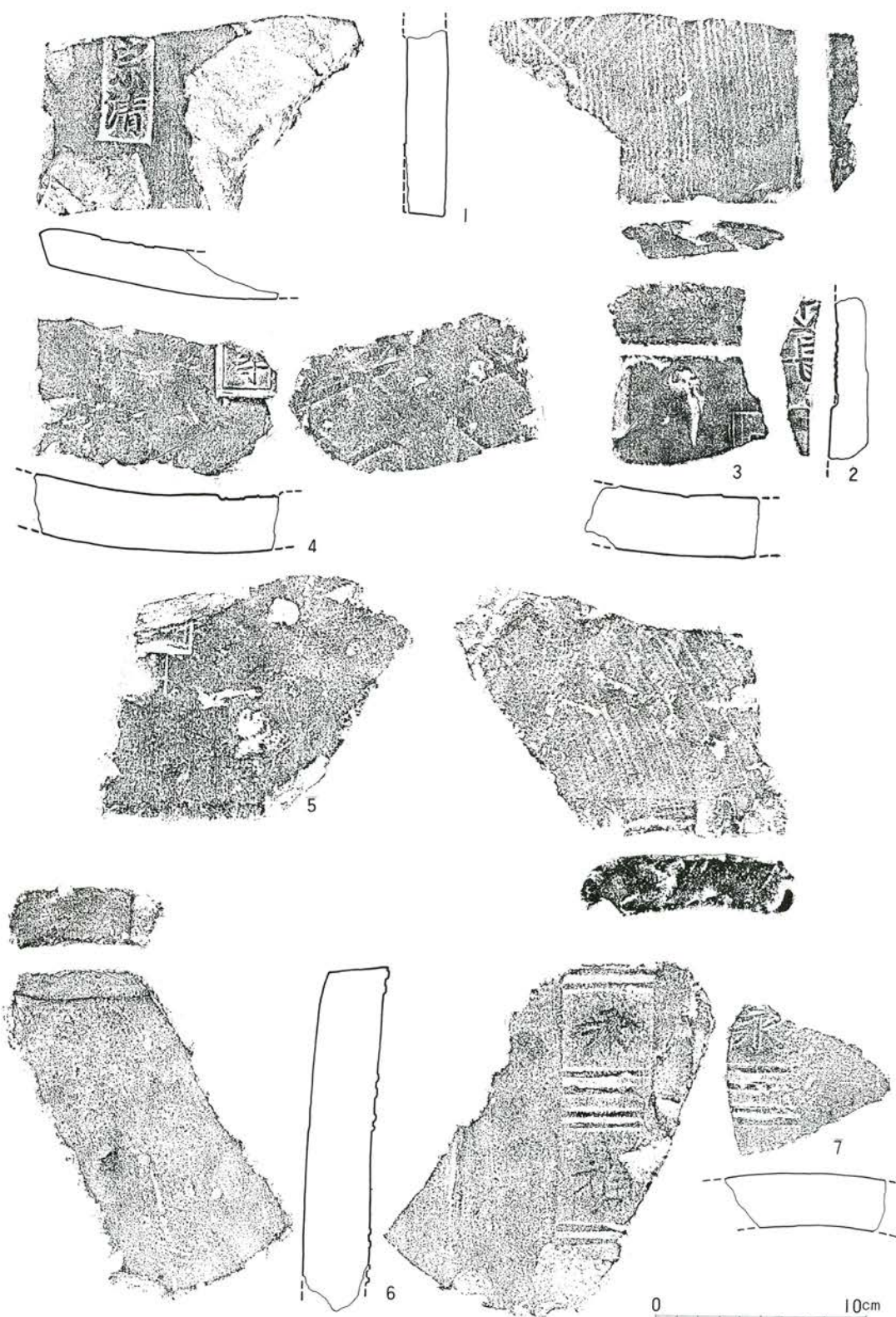


図12 文字押印の女瓦

は、小石を多く混じえた砂粒を含む粗土であり、焼成は良好なものが多い。灰褐～灰黒色及び灰白色を呈し、厚さ2.5cm前後と比較的厚手の製品である。火災に遭ったためか明赤褐色を呈した例もみられる。破片数にして244点出土した。

凸面は大きな斜格子の例（図11—1～3）と何種かの文様を組み合せた叩き目痕の例（図11—5～8）があるが、不規則な粗いナデツケで叩き目の不明瞭な例（図11—4）も数多くみられた。

凹面も不規則なナデが多用されており、布目痕を残す例は少ない。側面は1回ヘラ削り後、ナデを施し側縁の角を丸くおさめる。

女瓦E類（図9—10）；凸面に三鱗文や花菱文など特徴のある叩き目を有し、×状による斜格子目や横線など何種かの文様の組み合わせを持つ一群である。胎土中や凹・凸面に黒色微粒子が認められる。同種の女瓦は市内極楽寺、鶴岡八幡宮、横浜市称名寺などから多く出土している。

この他、東海地方窯系と推定される昨年度出土の女瓦と同質の製品が1片（図9—11）出土している。

文字押印瓦（図12—1～7）

1～3は女瓦凹面に人名を押印したもので、女瓦A類とした一群の製品に該当する。1は「宗清」、2は「□長」、6は同種の押印の枠を残すが文字は不明である。

4・5は女瓦D類に分類した製品である。女瓦凹面に「永福寺」銘が押捺されているが剥落が著しく、4は「寺」、5は枠の一部が残るだけである。

6・7は凸面に大きく「永福寺」銘を配し、各字間に4本の横線を入れた叩き目である。

鬼瓦（図9—12）

直径2.6cmの珠文を配し、その内外に側面と平行した凹線を描いて珠文帯と鬼面部とを分けている。胎土は良好で、焼成は硬質であり、灰褐色を呈する。この他に鬼瓦と思われる破片が4点出土している。

表3 出土瓦一覧表

出土地点 種類		イ	池 中		廊跡掘方			ニ	計	比率 (%)	備 考
			ロ	ハ	g	j	m				
瓦	VA I 01		2					11	13	57	「守」ヘラ書
	II 02		1					3	4	17	
	II 05							1	1	4	
	型式不明		2					3	5	22	
	小 計			5					18	23	100
宇 瓦	YN I 01		8					34	42	79	「永」2、「寺」1、 「福」2、 連珠文
	I 02							1	1	2	
	II 04	1						1	2	4	
	III 01	1						4	5	9	
	IV 01	1							1	2	
	型式不明							2	2	4	
	小 計		3	8					42	53	100

出土地点 種類		イ	池 中		廊跡掘方			ニ	計	比率 (%)	備 考
			ロ	ハ	g	j	m				
女 瓦	A	42	272	27	9	13	8	1396	1767	82	人名押印 3
	B		3					12	15	0.7	
	C	36	4	16				66	122	6	
	D	33	7					204	244	11.3	
	小 計		111	286	43	9	13	8	1678	2148	100
男 瓦	A	55	44	48		1	3	404	555	83	
	B	12	4	6				93	115	17	
	小 計		67	48	54		1	3	497	670	100
合 計		181	347	97	9	14	11	2235	2894		

註) イ、井戸跡出土 ロ、池中出土 ハ、排水路浚渫時の池底出土 ニ、遺構面上及び包含層出土

2. 陶磁器 (図13)

舶載品二点を含む五点が出土したが、うち一点は細片のため図示してはいない。

白磁 (1)

いわゆる端反白磁碗の、体部中位～口縁部片で、復元径16.9cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緻密で殆んど気孔が見られないが若干の夾雑物を含む。釉薬は幾分灰色がかった透明のものである。13世紀初頭を前後する頃の所産と思われる。深掘り1の積増し面下炭化層中から出土しており、当該層の実年代を知る手掛りを提供していよう。

東播系捏鉢 (2)

東播地方からの搬入品と思われる捏鉢の口縁部である。胎土は砂質できめが粗く、灰色を呈する。廊跡南域の包含層下層から出土。口径不明。

常滑 (3・4)

甕の底部分と頸部片の二点が出土した。胎土からみて同一個体であると思われる。いずれもきめ粗く石英等夾雑物を多く含む胎土で、器表近くで灰黒色を、胎芯で灰白色を呈する。共に廊跡中央付近の包含層下層から出土。

以上の他、図示し得なかった青白磁一点がある。小皿口縁部の細片で、やや端反り状になっており端部は尖る。14世紀前半頃のものであると思われる。廊跡南域の包含層下層から出土。

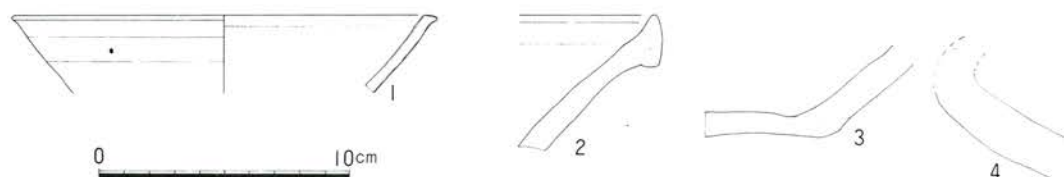


図13 陶磁器

3. かわらけ (図15)

かわらけ溜り1出土のかわらけ (1～3)

すべてロクロ成形によっており、比較的器高も高く概ね14世紀中期以降のものとして大過なからう。廊跡柱穴(C)の西約1m程の位置にある。

かわらけ溜り2出土のかわらけ (4～10)

これもすべてロクロ成形のものであり、やや古式の様相をとどめる8を除いて、この一群も市内他遺跡の14世紀中期以降の層に一般的に見られる形態を有している。従ってかわらけ溜り

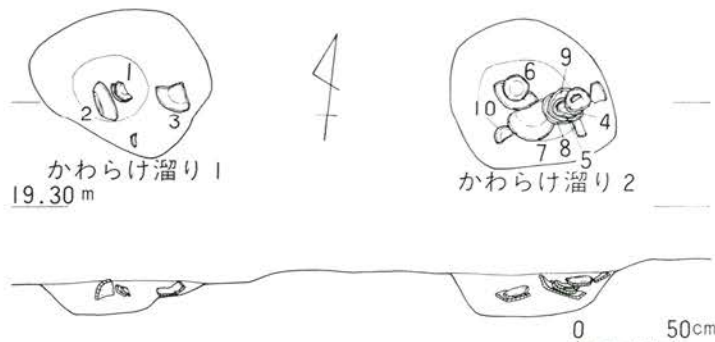


図14 かわらけ溜り1・2(かわらけに付した数字は図15中の番号)

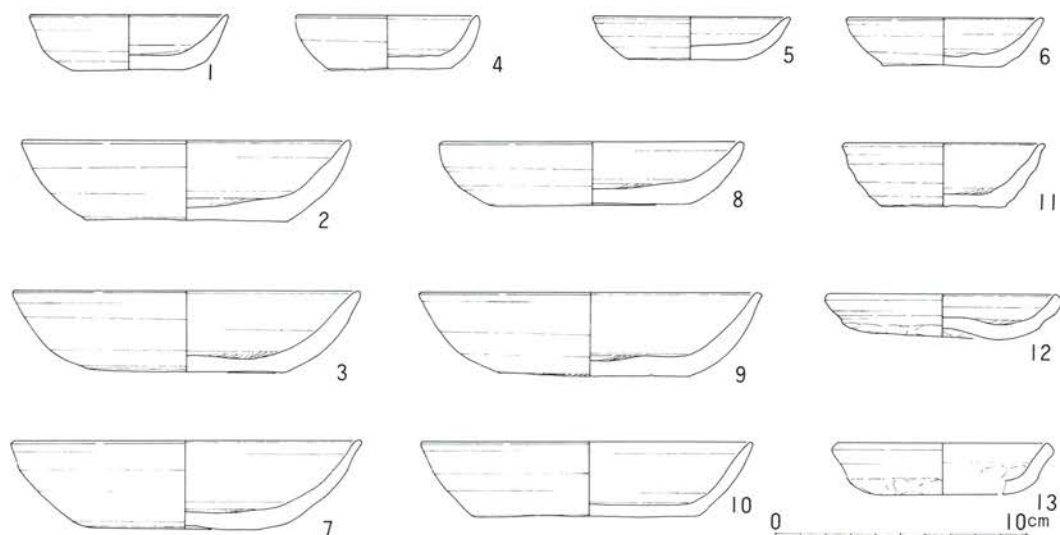


図15 かわらけ (1～3—かわらけ溜り1 4～10—かわらけ溜り2)
(11—TP2 12—深掘り1 13—池中出土)

1 出土のものとほぼ同時期に属すると考えられる。8については、前代（おそらくは14世紀初頭を前後する頃）に盛行した形態の終末期のものと捉えることが可能である。かわらけ溜り1の東約1.3mにあって廊跡柱穴（C）と一部切り合っているがこちらが新しい。

水路TP2出土のかわらけ（11）

ロクロ痕が残り、器高が高く、口縁部が幾分外反する形態は15世紀代に盛行していたと考えられる。

深掘り1出土のかわらけ（12）

手づくね成形のかわらけである。体部の横ナデが強く下半部に明瞭な稜を持ち、全体に薄手で浅い造りである。手づくね成形の中でも古式の様相と思われる。出土層位も端反白磁碗（図14—1）と層序的に共通した層から出土。概ね13世紀初頭を前後する時期のものと思われる。

池中出土のかわらけ（13）

手づくね成形で器高が幾分高く、全体的にややずんぐりしている。13世紀代のものであろう。

4. 木製品（図16）

木製品はすべて深掘り1から出土した。ほぼ同時期の層位から出土した端反白磁碗、手づくね成形のかわらけなどから、これらの木製品に13世紀初頭を前後する年代を想定することができる。

1・2は下駄である。1は長さ24cm、幅11.5cmを測る。歯はすり減っていない。大きさから見て大人用のものと思われる。2は長さ21.5cm、幅10.5cmを測る。土圧のためにずいぶん歪んでいる。

1・2の下駄ともに歯はさし歯でなく削り出されている。

3は板草履である。長さ19cm、幅9.4cm、厚さ4.5mmを測る。柱目板を削り出して小判形を呈す。

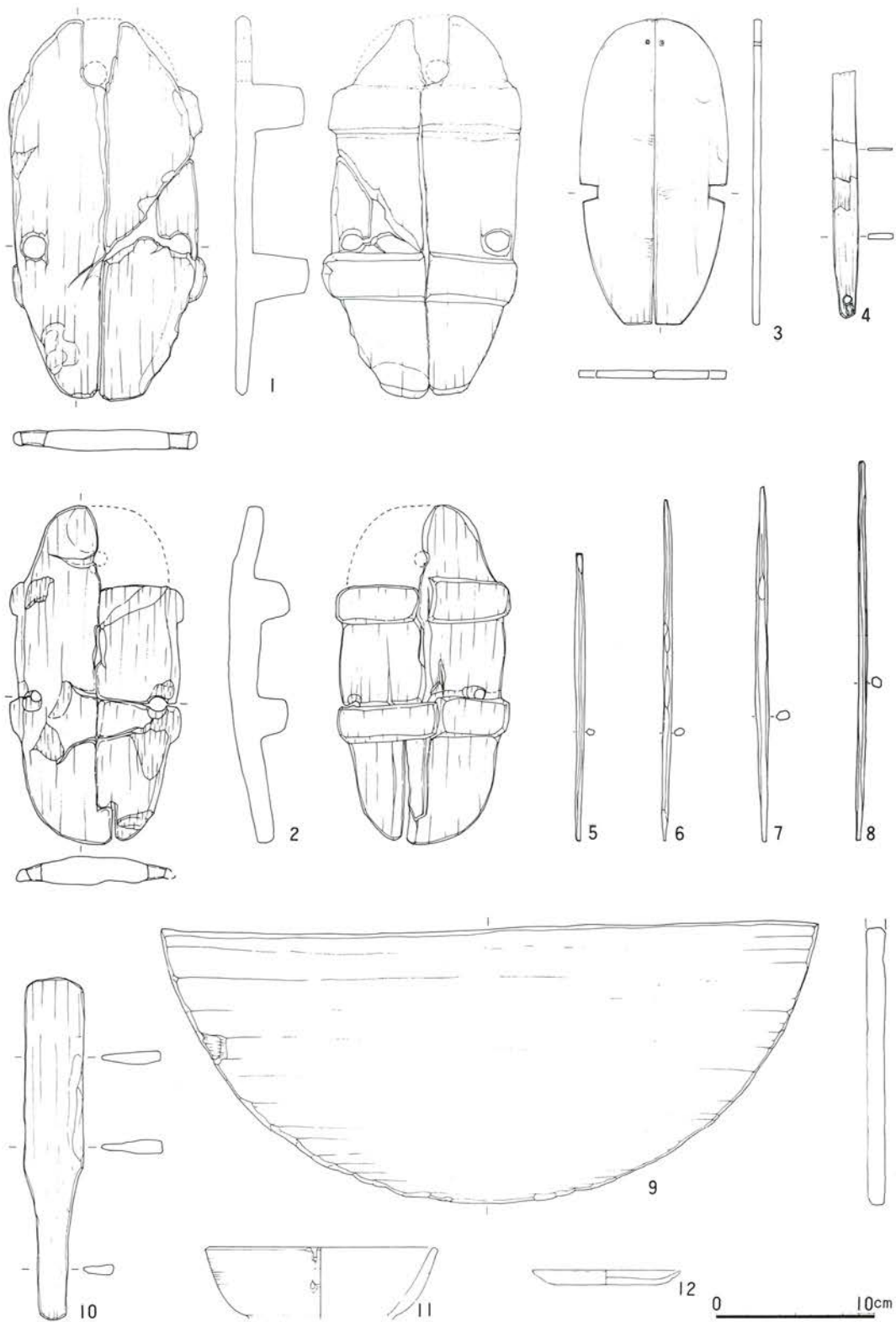


图16 木製品

上方に2ヶ所穿孔がある。

4は扇の残片である。長さ15cm、幅1.5cm、厚さ4mmを測る。根元に目釘穴を有する。

5～8は箸状木製品で、鋭い刃物で削り出されている。

9は曲物の底部である。径20.5cmを測る。

10は篋状の木製品で長さ22cm、幅3.8cm、厚さ8mmを測る。刃物のように片側が薄くなる。

10・11は漆器である。11は口径14cmを測る。内外面ともに無文の黒漆塗りの碗で、外面に轆轤目が残る。口縁端部から体部中央にかけて丁度竹串が通る程の大きさの穿孔がある。用途は不明である。12も無文の黒漆塗りの小皿である。体部に段を有する。

5 束石 (図17)

井戸出土の鎌倉石(凝灰岩)の石材である。長さ23cm、幅21cmを測る。正面と側面が火を受け、熱のために赤黒く変色している。形から見て、羽目石の間に入る束石と思われる。

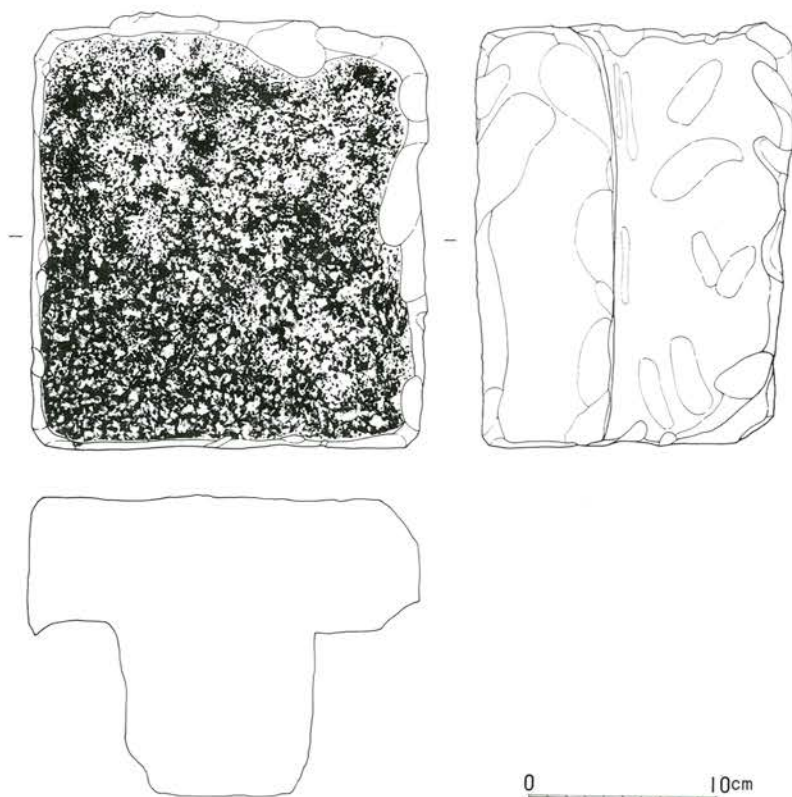


図17 束石

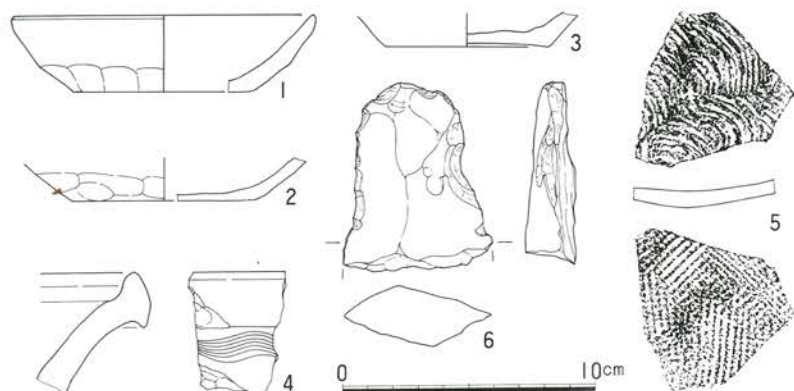


図18 先史、古代の遺物

6. 先史・古代の遺物（図18）

土師器二点・須恵器三点・石斧一点が出土しており、現在は低湿地になっている当地に永福寺造営で破壊される以前には先史・古代の遺構の存在していたことが窺えるのである。

土師器（1・2）

共に平安時代のもと思われる坏で、深掘り2の地業層中から出土した。1は復元口径11.8cm、同底径7cm、器高2.9cmで、外面体部下半および外底面にへう削りが見られる。胎土は赤褐色を呈し、きめが粗く、やや脆い。2は復元底径7.2cm。薄手の造りで外面体部下半および外底面にへう削り整形が施されている。胎土は橙色を呈し、これもやや脆い。

須恵器（3・4・5）

3はロクロ成形の坏で、外底面に糸切痕を残している。焼成不良のため灰褐色を呈し、胎土はきめが粗い。復元底径6.3cm平安時代の所産であろう。南西拡張区から出土。4は甕口縁部である。外面口縁下に櫛描の波状文がみられ、口縁部は縁帯状に肥厚する。胎土は灰～暗褐色を呈しきめが細かい。廊跡北域の包含層下層から出土。5は甕の底部である。内底面には青海波状の外底面には平行の叩き目が施こされている。胎土は灰黒色を呈しややきめが粗いが良く焼き締まっている。深掘り2下層の地業層中から出土。

石斧（6）

縄文時代のバチ形の打製石斧である。灰色の安山岩ふうの石を用いている。調査区中央部やや西寄りから出土した。

註1 竹沢嘉範「鎌倉市内出土の人名瓦」横須賀考古学会年報26号、1984年。図10—12は本例と同一型式の巴文鐙瓦と考えられる。

註2 昨年度「□光」と判読した押印は、鶴岡八幡宮所蔵の鐙瓦に「国元」と判読できる良好な資料が認められ、これに訂正する。なお、「国元」銘を押印する鐙瓦の瓦当文様はYA 01eと同範と考えられる。

第4章 今年度調査のまとめと問題点

今年度の調査は、前年度の主調査区（83A区）の南側隣接地において実施した。その結果は前章までに述べたとおりであり、得た知見も多いが、それにも増して新たに提起された重要な問題も多いと思われる。

今年度検出の堂跡（以下堂跡2と称する）を、昨年度検出のそれ（以下堂跡1と称する）と比較してみると、堂跡2は1より梁行で一間分小さく（桁行はいまのところ不明であるが、）従って堂跡2を三堂のうちの主建物と呼ぶことはできない。また位置的にみても、以南は同規模以上の堂の建つ余地はまずない。堂跡1の北側に目を転じると、廊と堂の組合が2組以上存在する広さはない。以上のことから勘案すると、堂跡2が三堂のうちの南側の建物で、正面から向って左手の脇堂——阿弥陀堂であることは間違いなく、また「断定しきれない」かった堂跡1が、二階堂であることも確実であると思われる。

礎石柱座の標高をみても、堂跡2が19.8m、廊跡が19.7mと、堂跡1のそれに比べるとおよそ50～60cm高くなっていることがわかり、やや奇異の感を抱かせる。これは、堂跡1に基壇を見出せないことと併せて、今後さらに追求されるべき問題である。

次に堂跡2の周囲の角柱列について考えてみたい。この角柱列は、椽束であるとされた昨年の堂跡1のものと同様、根元が土中であって腐り易いと思われる掘立式が採用されている。しかし、大型の礎石を持つ堂にはややそぐわない感もあり、殆んど柱穴底面に河原石を埋め込んでいるところからみても、あながち石材が不足していたとは考えられない。にもかかわらず、地表面に礎石を置く形式にしなかったのはいかなる理由であろうか。平泉毛越寺は永福寺がその範を取ったとされる寺であるが、ここでは、南大門、金堂円隆寺左右廊、嘉祥寺講堂などの基壇外周に角柱列がみられ、木造の基壇束柱であるとされている。永福寺が毛越寺を模したものであるならば、ここでも基壇構築の方法に毛越寺にあるようなものを採ったとしても、おかしくはない。つまり可能性として、この角柱列は、椽束ではなく基壇束柱であって、基壇壇側の崩落を防ぐための横板の押えではないか、ということが考えられよう。ただし、この考えからは井戸から出土した、壇正積基壇の束石と思われる加工鎌倉石の説明が出てこないのであるが、毛越寺にあっても上記以外の建物基壇は壇上積などであって、永福寺も他の建物で、例えば検出していないが軒廊などで採用されていた可能性はあろう。あるいはまた、前後は不明であるが、改修による別の時代のものであるとも考えられよう。いずれにせよ、この角柱列については、椽束であると断定するには無理があるように思われるので、他の可能性を指摘しておくのである。

角柱列についての問題の一つに、土層断面から改修の有無を判断することができなかったことが挙げられる。また検出面こそ地山上面（西側）と前面の地業層上面であるが、掘り込まれた面そのものがどこであったかは、土層断面で見られるとおり、上面の削平で、残念ながら不明である。こ

れは、この角柱列の層序的な時期を決める上で重要な点であり、今後の調査に期待したい。

堂跡基壇の項（第2章2）で触れた、最初の壇状部につながる黑色土面を追った南東拡張区では、遺構検出面下約70cmで同面が東に続くが、上層の汀線保護のため、さらに東側に延張することはできなかった。しかしいずれ、良好な場所を選んで苑池東岸までのトレンチを入れる必要があると思われる。

遺物の面ではまず、深掘り1で出土した端反白磁碗と手づくねかわらけが挙げられたよう。いずれも13世紀初頭を前後する頃のものであり、出土層の年代決定上、手掛となる。また廊跡掘方（C）近辺でまとまって出土していたかわらけは、14世紀中期以降のもので、廊廃絶年代を知る上で貴重である。創建時の瓦が北東拡張区池中や廊跡掘方から出土しており、堂跡の改修のあったことを窺わせるが、今回の調査では、いまだ決定づけるには至らなかった。

末筆ではあるが、本年の調査においても多くの諸先生・諸先輩の御教示を受け、周辺住民の方々からも御協力を賜った。記して深く感謝の意を表する次第である。

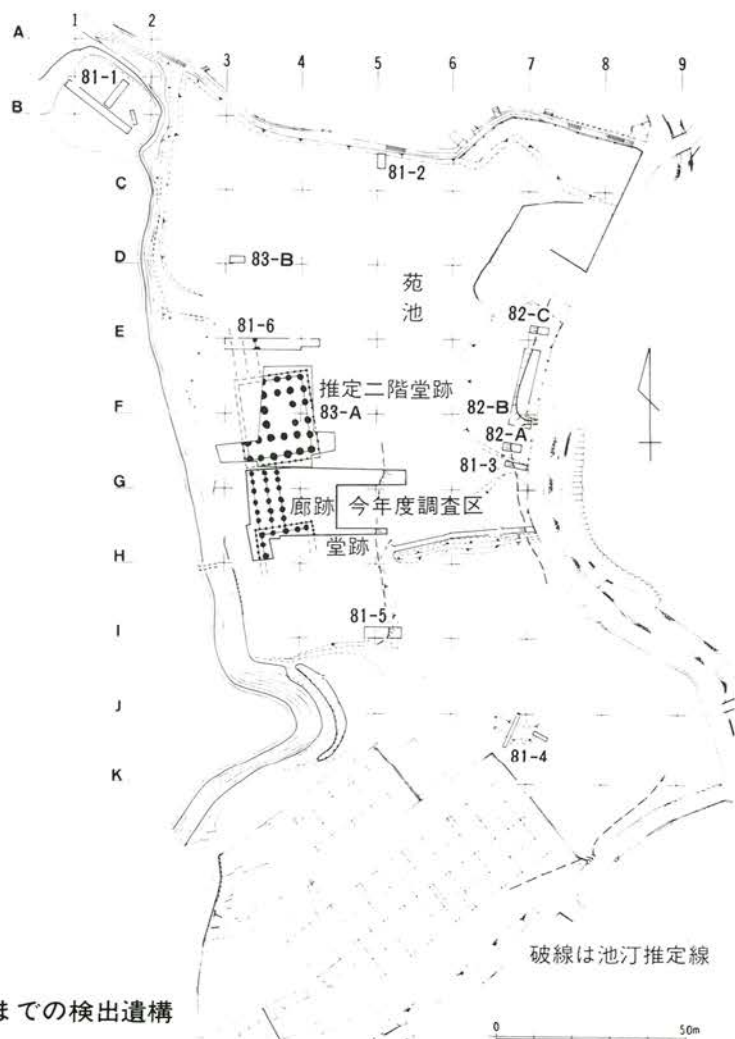


図19 今年度までの検出遺構